セラ　二　此いなんぢの途のあまねく地にしられ、なんぢの救のもろ〳〵の國のうちに知れんがためなり　三　かみよ庶民いなんぢに感謝し、もろ〳〵の民いみな汝をほめたゝへん　四　もろ〳〵の國いたのしみ又よろこびうたふべし、なんぢい直をもて庶民をさばき地のうへなる萬の國家をさめたまふべければなり、セラ　五　神よたみらいなんぢに感謝し、もろ〳〵の民いみな汝をほめたゝへん　六　地い產物をいだせり、神ゐゴの神いゐれらを福ひたまへん　七　神ゐれらをさきはひたまふべし、かくて地のもろ〳〵の極ことごとく神をおそれまん

イ民十〇卅五　箴卅三〇三
ロ箴九〇十八　何十三〇三
ハ詩九十七〇五　箴一〇四
ニ箴卅二〇十一、五十八〇
ホ詩六十六〇四
ヘ出六〇三
ト詩十〇十四、十八、百四十六〇九
チ伽上二〇五　詩百十三〇九
リ詩百七〇十、十四、百四十六〇七　徒十二〇六、七
ヌ詩百七〇卅四、四十
ル出十三〇廿一　士四〇十四
ヲ出十九〇十六、十八　士五〇四　箴十四〇一、三
ワ申十一〇十一、十二　然卅四〇廿六
カ申廿六〇五、九　詩七十四〇十九
ヨ民卅一〇八、九、五十四　雷十〇十六、十二〇八
タ詩百五〇卅七
レ民卅一〇三　雷十〇十、十二〇一
ソ申十二、五十一　王上九〇三　詩八十七〇一、二、百卅二、十三、十四　申卅三〇二　王下六〇一、六、十七　但七〇十六　來十二〇廿二　箴九〇十六
ツ申卅三〇二　箴四〇八
子徒一〇九　申四〇八
ナ士五〇十二
ラ詩七十八〇六十
ム申卅二〇卅九　箴四〇廿三　箴一〇十八、廿〇一
ウ詩百十〇六　箴三〇十三
ヰ詩五十五〇廿三
ノ民廿一〇　三
オ出十四〇廿二
ク傳五十八〇十
ヤ王上廿一〇十九
マ代上十三〇八、十五〇十六　箴四十七〇五
ケ申卅三〇廿八　箴四十八〇一
フ伽上九〇廿一
コ詩四十二〇八

第六十八篇　伶長にうたさしめたるダビデのうたなり讃美なり

一　ねがはくい神おきたまへ、ろの仇いことく〳〵くちり神をにくむものい前よりにげさらんことを　二　烟のおひやらるゝごとくかれらを驅逐たまへ惡きものい火のまへに蠟のとくるごとく神のみまへにてほろぶべし　三　されど義きものにい歡喜あり、かれら神の前にてよろこびをどらん實にたのしみて喜ぶん　四　神のみまへにうたへ、ろの名をほめたゝへよ乘て野をすぐる者のために大道をきづけ、かれの名をヤハとよぶ、ろの前によろこびをどれ　五　きよき住居ゐまします神いみなしごの父やもめの審士なり　六　神いよるべなきものを家族の中にをらしめ囚人をときて福祉にみちびきたまふ、されど悖逆者いうるほひなき地にすめり　七　神よなんぢい民にさきだちいでゝ野をすゝみゆきたまひき、セラ　八　うのとき地ふるひ天かみのみまへに漏る、シナイの山すら神イスラエルの神の前にふるひうごけり　九　神よなんぢの嗣業の地のつかれおとろへたるとき豊かなる雨をふらせて之をかたくしたまへり　十　曩になんぢの公會いろの中にとゞまれり、神よなんぢい惠をもて貧きものゝために預備をなしたまひき　十一　主みことゞを賜ふ、ろの佳音をのぶる婦

女いおほくして群をなせり　十二　もろ〳〵の軍旅の王たちいにげさる、逃去りたれど家なる婦女いろの掠物をわかつ　十三　なんぢら羊の牢のうちにふすときい鴿のつばさの白銀におほされろの毛の黃金におほるゝごとし　十四　全能者かしこにて列王をちらし給へるときいサルモンの山に雪ふりたるごとくなりき　十五　バシャンのやまい神の山なりバシャンのやまい峯かさなれる山なり　十六　峯かさなれるもろ〳〵の山よ、なんぢら何なれば神の住所にえらびたまへる山をねたみ見るや、然れエホバい永遠にこの山にすみたまへん　十七　神の戰車いよろづに萬をかさね千にちぶをくはふ、主ろの中にいます聖所にいますごとくシナイの山にいましゝごとし　十八　なんぢ高處にのぼり虜者をとりてにしてひきゐ禮物を人のなかよりも叛逆者のおかよりも受たまへり、ヤハの神こゝに住たまはんが爲なり　十九　日々にわれらの荷をおひたまふ主われらのすくひの神いほむべきかな、セラ　二十　神いきむ〳〵われらを助けたまへる神なり、死よりのがれうるい主エホバに由る　二一　神いろの仇のかうべを擊やぶりたまへん、愆のなかにとゞまるものゝ髮おほき巔頂をうちやぶりたまへん　二二　主いへらく我バシャンよりかれらを携へかへり海のふかき所よりたづさへ歸らん　二三　斯ておんぢの足をろのあたの血にひたし之をおんぢの犬の舌になめしめん　二四　神よすべての人いおんぢの進行きたまふをみたり、わが神わが王の聖所にすゝみゆきたまふを見たり　二五　讚うつ童女のおかにありて謳ふものい前にゆき琴ひくものい後にきたりへり　二六　おんぢらすべての會にて神をほめよ、イスラエルのみなもとより出るなんぢらよ、主をほめまつれ　二七　彼處にかれらを統るとしゐかきべニヤミンあり、ユダの諸侯とろの群衆とあり、またゼブルンのきみたちナフタリの諸侯あり　二八　なんぢの神いなんぢの力をたてたまへり、神よおんぢ我儕のためにおしたまひし事をかたくきたまへ　二九　エルサレムなるなんぢの宮のた

エ 王上十〇十七廿四、廿五代下卅二〇廿三、詩七十二〇十、七十六〇十一　箴六十〇十六、十七
テ 詩廿二〇十二
ア 母下八〇二、六　箴十九〇十九、廿一
サ 詩七十二〇九　箴四十五〇十四　番三〇十　徒八〇廿七
キ 詩十四〇廿
ユ 詩十四〇廿　詩十八〇十、六十八〇四、百四〇三
メ 詩廿九〇三
ミ 詩廿九〇一
シ 詩廿九〇四、六十五〇五、六十六〇十二
ヒ 詩四十五〇四、六十五〇五、六十六〇五、七十六〇十二

イ 詩六十九〇二、十四、十五　箴二〇五
ロ 詩四十〇二
ハ 詩六〇六　箴廿八〇十、十二、百廿三
ニ 詩百十九〇八十四　箴廿八〇十九　約十五〇廿五
ホ 詩廿五〇十九　約十五〇廿五
ヘ 詩廿一〇十一　箴五十三〇
三 約一〇十一、七〇五
ト 詩百十九〇百廿九　約二〇十七
チ 詩八十九〇五十、五十一　羅十五〇三

めに列王なんぢに禮物献さゝげん　二十 ねゞのはくい葦間の獸むらゞれる牯犢のごときもろ〳〵の民をいやしめてかれらに白銀をたづさへきたり、みづから服ふことを爲しめたまへ、神いたゞかひを好むもろ〳〵の民をちらしたまへり　三一 諸侯いエジプトよりきたり、エテオピアいあヨたゞしく神にむかひて手をのべん　三二 地のもろ〳〵のくによ、神のまへにうたへ主をほめうたへ、セラ　三三 上古よりの天の天にのりたまふ者にむかひてうたへ、みよ主いみこゑを發したまふ勢力ある聲をいだしたまふ　三四 なんぢらちからを神に歸せよ、うの稜威いイスラエルの上にとゞまり、うの大能い雲のなかにあり　三五 神のおろるべき狀いきよき所よりあらはる、イスラエルの神いうの民にちからと勢力とをあたへたまふ、神いほむべきかな

第六十九篇

百合花にあはせて伶長にうたはしめたるダビデのうた

一 神よねゞのはくい我をすくひたまへ、大水なゞれきたりて我ゞのたましひにまでおよべり　二 われ立止なき ふかき泥の中に沒づめり、ヨれ深水におちいる、おほみづわゞ上をあふれすぐ　三 ヨれ歎息によりてつかれたり、ヨゞの喉いかたきわゞの目いわゞ神をまちわびておとろへぬ　四 故なくしてわれをにくむ者わゞかしらの髮よりもおほく謂おくしてわゞ仇となり我をほろぼさんとするもの〻勢力つよし、われ掠めざりしものをも償はせらる　五 神よおんぢいわゞ愚おるを知りたまふ、わゞのもろ〳〵の罪いおんぢにかくれざるおり　六 萬軍のエホバ主よ、ねゞのたくい汝をまちのぞむ者をわゞの故によりて辱かしめらるゝことおからしめたまへ、イスラエルの神よねゞのたくいなんぢを求むる者をわゞの故ふよりて耻をおはしめらるゝことなからしめたまへ　七 我いなんぢのために謗をおひ耻いわゞ面をおほひたれゞなり　八 われわゞ兄弟にい旅人のごとく、わゞ母の子にい外人のごとくなれり　九 ういなんぢの家をおもふ熱心われをくらひ汝をうしるもの〻謗われにおよべり　十 われ涙をなゞして食をたち、わゞ靈魂をなげかすれゞ反てこれによりて謗をうく　十一 われ麁布をころもとなし〻にかれらゞ諺語となりぬ　十二 門にすわる者いわゞうへをかたる、われい醉狂たるものに謳ひはやされたり　十三 然いわれどエホバよ、われい惠のときに汝にいのる、ねゞのはくい神よなんぢの憐憫のおほきによりて汝のすくひの眞實をもて我にこたへたまへ　十四 ねゞのはくい泥のなかより我をたすけいだして沈まざらしめたまへ、我をにくむものより深水よりたすけいだしたまへ　十五 大水われを淹ふことなく淵われをのむことなく坑うの口をわゞうへに閉ることなからしめたまへ　十六 エホバよねゞのはくい我にこたへたまへ、なんぢの仁慈うるはしけれゞなり、なんぢの憐憫いおほし、われに歸りきたりたまへ　十七 面をなんぢの僕にかくしたまふなかれ、われ迫りくるしめり、ねゞのたくい速かに我にこたへたまへ　十八 ヨゞのたましひに近くよりて之をあゞなひヨゞの仇のゆゑに我をすくひたまへ　十九 汝いヨゞのうくる謗とはぢと侮辱とを知りたまへり、ヨゞの敵いみな汝のみまへにあり　二十 譏謗ヨゞの心をくだきぬれゞ我いたくヨゞうらへり、ヨれ憐憫をあたふる者をまちたれど一人だになく、慰むるものを俟たれど一人をもみざりき　二一 かれらい苦草をわゞくひものにあたへ、わゞ渴けるときに醋をのませたり　二二 ねゞのたくい彼等のまへなる筵い網となり、うのたのむ安逸いつひに羂となれ　二三 うの目をくらくして見しめず、うの腰をつねにふるはしめたまへ　二四 願くいなんぢの忿恚をかれらのうへにろ〳〵ぎ汝のいかりの猛烈をかれらに追及せたまへ　二五 かれらの屋をむなしくせよ、うの幕屋に人をすまはするなかれ　二六 かれらいなんぢゞ擊たまひたる者をせめ、なんぢゞの傷けたまひたるもの〻痛戒かたりふるれゞなり　二七 ねがたくいかれらの不義に不義をくたへてなんぢの義にあづからせ給ふなかれ　二八 かれらを生命の冊よりけして義きものとともに記さるゝことなからし

リ 詩卅五〇十三、十四
ヌ 王上九〇七　耶廿四〇九
ル 伯卅〇九　詩卅五〇十五、十六
ヲ 箴四十九〇八、五十五〇六　那後六〇二
ワ 詩百十四〇七
カ 詩六十九〇二、二十五
ヨ 民十六〇卅三
タ 詩六十三〇三
レ 詩廿五〇十六、八十六〇十六
ソ 詩廿七〇九、百二〇二
ツ 詩廿二〇六、七　箴五十三〇三　箴十二〇二
子 詩百四十二〇四　箴六十三〇五
ナ 伯十六〇二
ラ 太廿七〇卅四、四十八　可十五〇廿三　約十九〇廿九
ム 羅十一〇九、十
ウ 箴六〇九、十　約十二〇卅九、四十　羅十一〇十　哥前三〇十四
ヰ 撒前二〇十六
ノ 太廿三〇卅八　徒一〇廿
オ 箴五十三〇四
ク 代下廿八〇九　亞一〇十五
ヤ 羅十一〇廿八
マ 箴廿六〇十　羅九〇卅一
ケ 出卅二〇卅二　詩四〇三　默三〇五、十三〇八
フ 結十三〇九　詩十〇廿　十二〇廿三　箴十二〇二

コ 詩廿八〇七
エ 詩五十〇十三、十四、廿三
チ 詩卅四〇二
ア 詩廿二〇廿六
サ 出三〇一
キ 詩九十六〇十一、百四十八〇一　箴四十四〇廿三、四十九〇十三　箴五十五〇十二
ユ 詩五十一〇十八　箴四十四〇廿六
メ 詩三十三〇廿八
ミ

イ 詩四十〇十三、七十一〇十二
ロ 詩卅五〇四、廿六、七十一〇十三
ハ 詩四十〇十五
ニ 詩四十〇十七
ホ 詩百四十一〇一
イ 詩十五〇三、廿一〇一
ロ 詩卅一〇一
ハ 詩十七〇六
ニ 詩卅一〇三

めたまへ　二九 斯てわれいくるしみ且うれひあり、神よねがはくいなんぢの救われを高處におかんことを　三十 われ歌をもて神の名をほめたゝへ感謝をもて神をあがめまつらん　三一 此いをうしまたい角と蹄とあるナつよき牡牛にまさりて　三二 エホバよろこびたまへん　三三 謙遜者いこれを見てよろこべり、神を求たふ者よなんぢらの心いきべし　三四 エホバいまだしきものゝ聲をきゝ、その俘囚をかろしめたまはざるなり　三五 天地いエホバをほめ蒼海とその中にうごくあらゆるものといエホバを讃まつるべし　三六 神いシオンをすくひユダのもろ〳〵の邑を建たまふべければなり、かれらい其處にすみ且これをおのが有とせん　三七 その僕のすゑも亦これを繼ぐの名をいつくしむ者ゝの中にすまん

第七十篇　伶長にうたはしめたるダビデの記念のうた

一 神よねがはくい我をすくひたまへ、エホバよ速きたりて我をたすけたまへ　二 わが靈魂をたづぬるものは恥あはてんことを、わが害はるゝをよろこぶものゝ後に去りぞきて恥をおはんことを　三 あゝ視よや視よやといふものゝふのが恥によりて後に去りぞかんことを　四 すべて汝をたづねもとむる者のなんぢによりて樂みよろこむことを、おんぢの救を求たふものゝつねに神い大なるかあるとおへんことを　五 われい苦しみ且ともし神よいうぎて我にきたりたまへ、汝いわが助けわれを救ふものなり、エホバよねがはくい猶豫たまふなかを

第七十一篇

一 エホバよ我なんぢに依賴む、ねがはくい何の日までも恥うくることなからしめ給へ　二 なんぢの義をもて我をたすけ我をまぬかれしめたまへ、なんぢの耳をわれに傾けて我をすくひたまへ　三 ねがはくい汝わ

ホ 詩四十四〇四
ヘ 詩百四十〇一、四
ト 耶十七〇七、十七〇三
チ 詩廿二〇九十　箴四十六
リ 箴八〇十八　詩三〇八　哥前四〇九
ヌ 詩卅五〇廿八
ル 詩七十一〇十八
チ 母十七〇一　太廿七〇一
ワ 詩廿二〇十一、十九、卅五〇廿二、卅八〇廿一、廿二
カ 詩七十〇一
ヨ 詩卅五〇四、廿六、四十〇十四、七十〇二、七十一〇廿四
タ 詩卅五〇廿八、七十一〇八、廿四
レ 詩四十〇五、百卅九〇十七、十八
ソ 詩七十一〇九
ツ 詩五十七〇十
子 詩卅五〇十、八十六〇八、八十九〇六、八
ナ 詩六十〇三
ラ 何六〇二、三
ム 詩九十二〇二、三、百五十〇三

ごのすまひの磐となりたまへ、われ恒にろのところに往ことを得ん、なんぢ我をすくはんとて勅命をいだしたまへり、ろい汝いわが磐わが城なり　四 わが神よあしきものゝ手より不義、殘忍なる人のてより我をまぬかれしめたまへ　五 主エホバよ、なんぢいわが望なり、わが幼少よりの恃なり　六 われ胎をむなるゝより汝にまもらる母の腹にありしときより汝にめぐまれたり、我つねに汝をほめたゝへん　七 我おほくの人にあやしまるゝごとき者となれり、然どなんぢいわが堅固なる避所なり　八 なんぢの頌辭となんぢの頌美とい終日わが口にみちん　九 わが年老ぬるとき我をすてたまふなかれ、わが力おとろふるとき我をはなれたまふなかれ　十 わが仇いわがことを論ちひ、わが靈魂をうかゞふ者いたがひに議ていふ　十一 神かれを離れたり彼をたすくる者なし、かれを追てとらへよと　十二 神よわれに遠ざかりたまふなかれ、わが神よとく來りて我をたすけたまへ　十三 わがたましひの敵いはぢ且おとろへ我をそこなはんとするものい謗と辱とにおはれよ　十四 されど我いたえず望をいだきていやます〳〵汝をほめたゝへん　十五 わが口いひねもす汝の義とおんぢの救とをかたらん、われらの數を去らざればなり　十六 われい主エホバの大能の事跡をたづさへゆかん、われい只おんぢの義のみをかたらん　十七 神よなんぢわれを幼少より教へたまへり、われ今おいたるまで汝のくすしき事跡をのべつたへたり　十八 神よねがはくいわれ老て頭髮さろくなるとも我がなんぢの力を次代にのべつたへ、なんぢの大能を世にうまれいづる凡のものに宣傳ふるまで我をはなち給ふなかれ　十九 神よなんぢの義もまた甚たかし、なんぢい大なることをなしたまへり、神よたれか汝にひとしき者あらんや　二十 汝われらを多のおもき苦難にあはせたまへり、なんぢ再びわれらを活し、われらを地の深所よりあげたまはん　二一 ねがはくい我をいよ〳〵大あらしめ歸りきたりて我をあぐさめ給へ　二二 わが神よ、さらばわれ箏をもて

ウ 王下十九〇廿二 箴六十〇九
ノ 詩百三〇四
非 詩七十一〇八、十五
オ 詩七十一〇十五

イ 箴十一〇二、箴四、卅二〇一
ロ 詩八十五〇十 箴卅二〇十七、五十二〇七
ハ 箴十一〇四
ニ 詩七十二〇七、十七、八十九〇卅六、卅七
ホ 伊下廿三〇四 何六〇三
ヘ 箴二〇四 但二〇四十四 路一〇卅三
ト 出廿三〇卅一 王上四〇廿一、廿四 詩二〇八、八十〇十一、八十九〇廿五 亞九〇十
チ 詩七十四〇十四
リ 箴四十九〇廿三 米七〇十七
ヌ 代下九、〇廿一 詩四十五〇十二、六十八〇廿九 箴四十九〇七、六十〇六、九
ル 箴四十九〇廿二、廿三
ヲ 伯廿九〇十二
ワ 詩十六〇十五
カ 王上四〇廿
ヨ 詩八十九〇卅六
タ 創十二〇三、廿七〇十八 耶四〇三
レ 路一〇四十八

汝をほめ、なんぢの眞實をほめたゝへん。イスラエルの聖者よわを琴をもてなんぢを讃うたゝん　われ聖前にうとふときわが口唇よろこびおんぢの贖ひたまへるわゞの靈魂おほいに喜ばん　わが舌もまた終日なんぢの義をかたらん、わをを害そんとするもの愧惶つれゞなり

第七十二篇　ソロモンのうた

一　神よねゞがてくい汝のもろ〳〵の審判を王にあたへ、おんぢの義をわうの子にあたへたまへ　かをい義をもてなんぢの民をさばき公平をもて苦しむものを鞫かん　義によりて山と岡とい民に平康をわたふべし　かをい民のくるしむ者のために審判をなし乏しきもの〳〵子輩をすくひ虐ぐるものを壞きたまゝん　かれらい日と月とのあちんかぎり世々おそれなべて汝をおうるべし　かれい苅とれる牧にふる雨のごとく地をうるほす白雨のごとくのゞまん　かをの世にたゞらき者いさかえ平和い月のうするまで豊かおちん　またうの政治い海より海にいたり河より地のはてにおよぶべし　野にをる者いうのまへに屈み、うの仇い塵をおめん　タルシ、および島々の王たちい貢をおさめ、シバとセバの王たちい禮物をさゝげん　もろ〳〵の王いうのまへに俯伏し、もろ〳〵の國いかをにつかへん　かれい乏しき者をうの叫ぶときにすくひ助けなき苦しむ者をたすけ　弱きものと乏しき者とをあはれみ乏しきもの〳〵靈魂をすくひ　かをらのたましひを暴虐と強暴とよりあゞのおひたまふ、うの血いみまへに貴かるべし　かをちい存ふべし、人いシバの黄金をさゝげてかをのために恆にいのり終日かををいはゝん　國のうち五穀ゆたかにしてうの實いレバノンのごとく山のいたゞきにうよぎ邑の人々い地の草のごとく榮ゆべし　かをの名いつねにたえず、かをの名い日の久しきごとくに絶ることおし、人いかをによりて、福祉をえん、もろ〳〵の國いか

ソ 出十五〇十一 詩七十七〇十四、百卅六〇四
ツ 代上十九〇十 詩四十一〇十三、百六〇四十八
子 尼九〇六
ナ 民十四〇廿一 亞十四〇九

イ 伯廿一〇七 詩卅七〇一 耶十二〇一
ロ 伯廿一〇九
ハ 詩百九〇十八
ニ 伯十五〇廿七 詩十七〇十、百十九〇七十 耶五〇廿八
ホ 何七〇十六
ヘ 箴俊二〇十八 箴十六
ト 詩七十五〇八
チ 伯廿二〇十三 詩十〇十一、九十四〇七
リ 詩七十三〇三
ヌ 伯廿一〇十五、卅四〇九、卅五〇三 馬三〇十四
ル 詩廿六〇六
ヲ 傳八〇十七
ワ 詩七十七〇十三
カ 詩卅七〇卅八
ヨ 詩卅五〇六
タ 詩七十八〇六十五

ををさいたもひおる者ととなへん　たゞイスラエルの神のみ奇しき事跡をおしたまへり、神ヱホバいほむべきかお　うの榮光の名いよ〳〵にほむべきかお全地いうの榮光にて滿べし、アーメン、アーメン　ニッサイの子ダビデの祈いををりぬ

第七十三篇　アサフのうた

一　神いイスラエルにむかひ心のきよきものに對ひておことに惠あり　然いわれゞわれいわが足つまづくゞかり、わが歩すべる心かりにてありき　こいわれ惡きもの〳〵榮ゆるを見てうの誇れる者をねたみしによる　かれらい死るに苦しみなく、うのちからい反てかたし　かれらい人のごとく憂にをちず人のごとく患難にあふことおし　このゆゑに傲慢い粧飾のごとくうの頸をめぐり强暴いころものごとく彼等をおはへり　かれら肥ふとりてうの目とびいで心の欲ひにまさりて物をうるなり　また嘲笑をおし惡をもて暴虐のことばをいだし高ぶりてものいふ　うの口を天におき、うの舌を地にあまねく往しむ　このゆゑにかれの民いこゝにかへり水のみちたる杯をゑぼりいだして　いへらく、神いかで知たまゝんや、至上者に知識あらんやと　視よかれらい惡きものなるに常にやすらかにしてうの富ましくはゝれり　誠ふわれいいたづらに心をきよめ罪戒をかさずして手をあらひたり　ういわれ終日おやみにあひ朝ごとに責をうけしおり　われもし斯ることを述んといひしおらゞ我なんぢが子輩の代をあやまらせしならん　われこれらの道理ををちんとして思ひめぐらしゝにわが眼いたく痛たり　われ神の聖所にゆきてかれらの結局をふかく思へるまでい然りき　誠になんぢいかれらを滑かなるところにおき、かれらを滅亡におとしいれたまふ　かれらい瞬間にやぶれたるかな、彼等い恐怖をもてことゞく滅びたり　主よおんぢ目をさ

レ 伯廿〇八　詩九十〇五　賽廿九〇七、八
ソ 詩七十三〇三
ツ 詩九十二〇六　箴卅〇二
ネ 詩廿二〇八　箴五十八〇八
ナ 雅三〇八
ラ 詩八十四〇二、百十九〇八　十一
ム 詩十六〇五、百十九〇五十七
ウ 詩百十九〇百五十五
ヰ 出卅四〇十五　民十五〇卅九　雅四〇四
ノ 來十〇廿二
オ 詩百七〇廿二、百十八〇十七
イ 詩四十四〇九、廿三、六十〇一、十、七十七〇七　那卅一〇卅七、卅三〇廿四
ロ 詩九十五〇七、百〇三
ハ 出十五〇十六　申九〇廿九
ニ 申卅二〇九　那十〇十六
ホ 箴二〇七
ヘ 但六〇廿七
ト 王上六〇十八、廿九、卅二、卅五
チ 王下廿五〇九
リ 詩八十九〇卅九
ヌ 詩八十三〇四
ル 母上三〇一　民八〇十一

ましてかれらが像をかろしめたまはんときい夢みし人の目さめたるがごとし　二　わが心いうれひ、わが腎いさゝれたり　三　われおろかにして知覺あし聖前にありて獸にひとしかりき　三　されど我つねになんぢとともにあり、汝わが右手をたもちたまへり　四　なんぢの訓諭をもて我をみちびき後ちたわれをうけて榮光のうちゐ入たまむん　五　汝のほかに我たれをか天ゐもたん、地ゐいなんぢの他にわが慕ふものあし　六　わが身とわが心といおとろふ、されど神いわがとこしへの嗣業なり　七　視よなんぢに遠きものい滅びん、汝をはなれて姦淫をおこなふ者いみなおんぢ之をほろぼしたまひたり　八　神にちかづき奉るい我によきことあり、われい主ヱホバを避所としてうのもろ〳〵の事跡をのべつたへん

第七十四篇

アサフの教訓のうた

一　神よいかなれば汝われらをかぎりなく棄たまひしや、奈何ぞおんぢの草苑の羊にみいかりの煙あがるや　二　ねがはくい往昔なんぢが買求めたまへる公會ゆづりの支派とおさんとて贖ひたまへるものを思ひいでたまへ、又おんぢが住たまふシオンの山をおもひいで給へ　三　とこしへの滅亡れ跡にみあしを向たまへ仇い聖所にてもろ〳〵の惡きわざをおこなへり　四　なんぢの敵いおんぢの集れなかに吼たけびおのゞ旗をたてゝ誌とせり　五　かきちい林のえげみにて斧をあぐる人の狀にみゆ　六　いま鉞と鎚とをもて聖所のなかなる彫刻めるものをことゞく毀ちおとせり　七　かれらいなんぢの聖所に火をかけ名の居所をけがして地におとしたり　八　かれら心のうちにいふ、われらことゞく之をこぼちあらさんと、かくて國内おる神のもろ〳〵の會堂をやきつくせり　九　われらの誌いみえず預言者も今いなし、斯ていくろの時をかふべき、われらのうちに知るものなし　十　神よ敵いいくろの時をふるまでろしるや、仇いなんぢの名をとこしへゐ

チ 哀二〇三
ワ 詩四十四〇四
カ 出十四〇廿一
ヨ 箴五十一〇九、十　結廿九〇三、卅二〇二
タ 詩七十二〇九
レ 民十四〇九
ソ 出十七〇五、六　民廿〇十一　詩百五〇四十一　賽四十八〇廿一
ツ 箴三〇十三
ネ 創一〇十四
ナ 使十七〇廿六
ラ 創八〇廿二
ム 詩七十四〇廿二　獸十六〇十九
ウ 詩卅九〇八
ヰ 詩二〇十四
ノ 詩六十八〇十
オ 創十七〇七、八　利廿六〇四十四、四十五　詩百六〇四十五　那卅三〇廿一
ク 詩七十四〇十八　詩八十九〇五十一
イ 亞一〇廿一

汚すおらんか　十一　いかなれば汝ろの手みぎの手をひきたまふや、ねがはくい手をふところよりいだしてかれらを滅したまへ　十二　神いにしへよりわが王おり、すくひを世の中におこなひたまへり　十三　おんぢろの力をもて海をわかち水のなかなる龍の首をくだき　十四　鱷のかうべをうちくだき野にすめる民にあたへて食とおしたまへり　十五　おんぢい泉と水流とをひらき、又もろ〳〵の大河をからしたまへり　畫いおんぢのもの夜も又汝のものおり、おんぢい光と日とをろおへ　十七　あまねく地のもろ〳〵の界をたて夏と冬とをつくりたまへり　十八　エホバよ仇いおんぢをろしり愚かおる民いおんぢの名をけがせり、この事をおもひいでたまへ　十九　願くいおんぢの鴿のたましひを野のあらき獸にわたしたまふおかを、苦しむものゝ命をとこしへに忘れたまふおかを　二十　契約をかへりみたまへ、地のくらきところい强暴の宅にて充たされおり　二一　ねがはくい虐げらるゝものを慚退かしめ給ふおかを、懶るものと苦しむものとゐ聖名をほめたゝへしめたまへ　二二　神よおきておんぢの訟をあげつらひ愚かおるものゝ終日おんぢを誇るをみこゝろゐ記たまへ　二三　おんぢの敵の聲をわすれたまふおかを、汝にさからひて起りたつ者のかしがましき聲いたえずあがをり

第七十五篇

讃美おり

一　神よわれら汝にかんしやす、われら感謝す、おんぢの名いちかく坐せばなり、もろ〳〵の人いおんぢの奇しき事跡をかたりおへり　二　定りたる期いたらば我なほき審判をなさん　三　地とすべての之にすむものと消去しとき我ろのもろ〳〵の柱をたてたり、セラ　四　われ誇れるもれゐ誇りかにおこなふなかきといひ惡きものに角をあぐるなかれといへり　五　おんぢらの角をたかく擧るなかれ頸をかたくして高りいふなかを

イ 詩四十八〇一至三
ロ 詩四十六〇九、哈卅九〇九
ハ 哈卅八〇十二、十三、卅九
ニ 撒四十六〇十二
ホ 詩十三〇三、耶五十一〇卅
ヘ 出十五〇一、十一、哈卅九〇廿
ト 撒一〇六
チ 哈卅八〇廿
リ 詩九〇七、弓九、七十二〇四
ヌ 代下廿〇廿九卅
ル 出九〇十六、十八〇十一
ヲ 詩六十五〇七
ワ 傳五〇四、弓六
カ 代下廿二〇廿三、廿四、詩六十八〇廿九、八十九〇七
ヨ 詩三〇四
タ 詩五十〇十五

擧ることい東よりゐあらず西よりゐあらず、また南よりゐもあらざるなり　七　たゞ神のみ審士にましませ
ど此をさげ彼をあげたまふ　八　ヱホバの手ゐさかづきありて酒ゐわだてり、うれ中ゐものまじりてみつ、神
これをろゝぎいだせり、誠にうの滓い地のすべてのあしき者ゑぼりて飲むべし　九　されど我いヤコブの神
をのべつたへん、とこしへに讃うたへん　十　われ惡きものゝすべての角をきりはおたん、義きものゝ角いあ
げらるべし

第七十六篇

琴にあたせて伶長にうたむしめたるアサフの歌あり讃美なり

一　神いユダにゑられたまへり、うの名いイスラエルに大あり　二　またサレムの中にうの幕屋あり、うの居所
いシオンゐあり　三　彼にてかれい弓の火矢淺をり盾と劍と戰陣とをやぶりたまひき、セラ　四　おんぢ榮光あり
掠めうばふ山よりもたふとし　五　心のつよきものい掠められる、かをらい睡にゑづみ勇ましきものい皆うの
手を見うしなへり　六　ヤコブの神よおんぢの叱咤によりて戰車と馬とともに深睡につけり　七　神よおん
ぢこそ懼るべきものゐを、一たび怒りたまふときい誰かみまへゐ立えんや　八　おんぢ天より宣告をのりた
まへり、地のへりくだる者をみゐすくむんとて神のさばきに立たまへるとき地いふるをて默したり、セラ
十　實に人のいかりい汝をほむべし、怒のあまりい汝ゐのこの帶としたまむん　十一　おんぢの神ヱホバゐちか
ひをたて〻償へ、うのまはりゐるすべての者いふうるべきヱホバに禮物をさゝぐべし　十二　ヱホバいもろも
ろの諸侯のたましひを絶たまむん、ヱホバい地の王たちのふうるべき者ゐり

第七十七篇

ヱドトンの體ゐゑたゞひて伶長にうたはしめたるアサフのうた

一　我わゞこゑをあげて神ゐよむゝん、わを聲を神ゐあげおゞうの耳をわをゐかたぶけたまはん　二　わゞゐ

ハ 撒廿六〇九、十六
ニ 詩百十二〇三、百四十三〇四
ホ 申卅二〇七、詩百四十三〇五、箴五十一〇九
ヘ 詩四十二〇八
ト 詩四〇四
チ 詩七十四〇一
リ 詩八十五〇一
ヌ 撒九〇六
ル 撒四十九〇十五
ヲ 詩卅一〇廿二
ワ 詩百四十三〇五
カ 詩七十三〇十七
ヨ 出十五〇十一
タ 出六〇六、申九〇廿九
レ 出十四〇廿一、箴三〇十五、十六、詩百十四〇三、箴三〇八
ソ 伊下廿二〇十五、箴三〇十一
ツ 詩九十七〇四
ネ 伊下廿二〇八
ナ 箴三〇十五
ラ 出十四〇廿八
ム 詩七十八〇五十二、八十〇一、撒六十三〇十一、十二
何 十二〇十三

やみの日ゐわを主をたづねまつをり、夜わゞの手をのべてゆるむることゐかりき、わゞたましひい慰めらる
るをいゐみたり　三　わを神をおもひいでゝ打ゐやむ、わを思ひゐげきてわゞ靈魂ゐとろへぬ、セラ　四　おんぢ
いわゞの眼をさゝへて閉ゞしめたまへず、我いものいふこと能へぬほどに惱みたり　五　わをむかしの日いに
しへの年をおもへり　六　わを夜わゞの歌をおもひいづ、わをわが心ゐてふかくおもひ、わゞ靈魂いねもころに
尋ねもとむ　七　主いとこしへに棄たまふや再びめぐみを垂たまへざるや　八　うの憐憫いのこりゐく永遠にさ
り、うのちかひい世々ゐがく廢をたるや　九　神い恩をほどこすことを忘をたまふや、怒をもてうのゐむをみ
を緘たまふや、セラ　十　斯るときに我いへらく此いたゞわゞの弱さがゆゑのみ、いで至上者のみぎの手のもろ
もろの年をおもひいでん　十一　われヤハの作爲をのべとおへん、われ往古よりありし汝ゞのくすしきみわざを
思ひいださん　十二　また我おんぢのすべての作爲をおもひいで汝のおしたまへることを深くおもへん　十三　神よ
おんぢの途いいときよし、神のごとく大なる神いたれゞや　十四　おんぢい奇きみわざをおしたまへる神ゐり、
もろ〻の民のゐひだにうの大能を表めし　十五　うの臂をもてヤコブヨセフの子輩ゐんぢの民をゐゞのゐひた
まへり、セラ　十六　かみよ大水ゐんぢを見たり、おほみづ汝をもてをのゝき淵もまたふるへり　十七　雲いみづをう
そぎいだし空いひゞきをいだし、ゐんぢの矢いむしりいでたり　十八　なんぢの雷鳴のこゑい暴風のうちにゐ
りき、電光い世をてらし地いふるひうごけり　十九　ゐんぢの大道い海のなかにゐり、ゐんぢの徑いおほみづの
中にゐり、なんぢの蹤跡いたづねゞたかりき　二十　ゐんぢうの民をモーセとアロンとの手によりて羊の群の
ごとくみちびきたまへり

第七十八篇

アサフの教訓のうた